

# 「いそのはまにつるのこゑごゑなくを」に関する一考察

## — 紫式部集試論 —

安藤 重和

—  
紫式部集（実践女子大本）の二〇番から二二番を見よう。

あふみのみづうみにて、みがさきといふところに  
あみひくを見て

二〇番 みをのうみにあみひくたみのてまもなくたちあ  
につけてみやここひしも

又、いそのはまにつるのこゑごゑなくを

二二番 いそがくれおなじこころにたつぞなく。なにお  
もひいづる人やたれぞも

夕だちしぬべしとてそらのくもりてひらめくに

二二番 かきくもりゆふだつなみのあらければ、うきた  
る舟ぞしづごころなき

紫式部が父藤原為時に伴われて越前へ下ったのは、長  
徳二年夏頃というのが定説であろう。日本紀略 長徳二  
年正月二八日条に「俄停越前守国盛、以淡路守為時任之」

とあり、為時の兄の家集「為頼集」に「越前へくだるに  
こうちぎのたもとに、なつごろもうすきたもとをたのむ  
かないのるこころのかくれなければ」とある。為頼が饒  
別を届けるべき人で越前に下った人とは、弟の為時以外  
には考え難い。「なつごろも」が贈られているのは下向  
が夏頃であつたからであろう。定説に従いたい。

二〇番歌が、長徳二年夏頃に紫式部が父藤原為時に伴  
われて越前へ下つた際の歌であることも諸説一致してい  
ると思う。「み

田孝夫氏は研究史を踏まえつつ詳しく考察され、「三尾  
川河口の岬である鴨川の崎」を比定された。

多分、紫式部一行は現在の高島町の「勝野」で一  
夜を過ごし、朝早くそこを出立し、この三尾川（現  
在の鴨川）河口の「三尾が崎」を通過する折に、漁  
民が魚をとる姿をかいま見たのである。朝に限定す  
るのは、琵琶湖での漁のほとんどは、早朝におこな

われるものであり(略)

鋭い御指摘である。ともあれ、「みをがさきといふところ」を琵琶湖西岸中央部に想定する限りに於いては、異説はない。「あみひく」季節については、竹内美千代氏(注2)が、

(琵琶湖で)漁民が網を引くのを見たのは、夏である。土地の人に聞いても今でもそのようである。

彼女と同じ時代の『赤染衛門集』にも、夫と共に尾張へ下る時、琵琶湖を旅して

大津にとまりたるに網引かせてみせんとてまだ  
暗きよりおりたちたるをのこどものあはれに見  
えしに

朝ぼらけおろせる網の綱みれば苦しげに引くわざ  
にありける

とあり、七月ついたち頃逢坂の関で歌を詠んで、七日に愛知川に着いているから、『紫式部集』の綱引も夏の景物と見て差支えないであろう。

と指摘されている。『赤染衛門集』に「まだ暗きより」とか「朝ぼらけ」とかある点は、久保田氏が「琵琶湖での漁のほとんどは、早朝におこなわれるものであ」と言われることと符合している。こうして見ると、二〇番歌を長徳二年夏頃の早朝に越前下向途上琵琶湖西岸中央部の「みをがさきといふところ」で紫式部が詠んでいる

ことは、動くまい。

## 二

次に二一番について検討したい。この歌に関しては、「いそのはま」が普通名詞か固有名詞かという問題や「つるのこゑごゑなく」季節が夏であり得るか否かの問題などをめぐって諸説が展開されているが、それらについては南波浩氏や加納重文氏(注3)が行き届いた整理をなさっているので参照されたい。

さて、「いそのはま」について南波浩氏は次のように主張される。

上代からイソ(磯・磯)とハマ(浜)とは異質のものとして区別されていた。古事記の倭健命薨去の条の歌謡に、「浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ」と詠んでいるのは、イソとハマを明らかに区別している証左である。(略)そのように異質の「磯」と「浜」とを結合させるような用例は、磯野磯谷など姓氏にはあっても、一般の普通名詞としてはあまりないのではないか。したがって、ここで式部が「磯の浜」と表現しているのは、「磯」は地名それは琵琶湖の東岸にある坂田郡磯村(現在、米原町大字磯)をさし、「浜」はその浜辺、湖辺の水際を意味するもの

と考えられる。

竹内美千代氏は、この点に關し、「固有の地名『磯』に限る必要はない。三尾が崎を通り安曇川の砂洲を過ぎると（略）山が迫り海津湾あたりには磯と呼べる岩礁の多い岸はいくらでもあるのである」と述べられ、また加納重文氏も「海津大崎の岩礁」の写真を示しつつ、同様の指摘をされている。琵琶湖西岸の海津周辺に「磯」がいくらでも存在するのだが、しかし南波氏が問題にされたのは、「磯」の有無ではなく、「異質の『磯』と『浜』とを結合させるような（普通名詞としての）用例」の有無つまり表現上の問題であった。

常に「イソとハマとは異質のもの」として表現されるのか検討したい。南波氏が取り上げられた「古事記の倭健命薨去の条」を引く。

是に、(倭健命は)八尋の白ち鳥と化り、天に翔りて、浜に向ひて飛び行きき。爾くして、其の后と御子等と、其の小竹の刈杖に、足を切り破れども、其の痛みを忘れて、哭き追ひき。此の時に、歌ひて曰はく、  
浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな  
又、其の海塩に入りて、なづみ行きし時に、歌ひて曰はく、

海処行けば 腰泥む 大河原の 植多草 海処

は いさよふ

又、飛びて其の磯に居し時に、歌ひて曰はく、

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

なるほど、「浜よは行かず 磯伝ふ」の部分では「浜」と「磯」が対置され「イソとハマとは異質のもの」として扱われている。だが、引用部の初めの「浜」も同じであらうか。「天に翔りて」「飛び行」く「八尋の白ち鳥」の行方を「浜に向ひて」と示しているわけであるが、飛び立つ時「磯」ではない「浜」に限定して行方を定めているとすれば、引用部終わりに「飛びて其の磯に居し時」とあるのは矛盾であらう。「飛びて其の磯に居し時」を日本思想大系本は「白鳥が浜から飛び立って岩の多い水辺に居る時」つまり一旦他の「浜」に舞い降りた後に再び飛び立って「磯」に舞い降りた時と解しているが、「歌ひて曰はく(略)又(略)歌ひて曰はく(略)又(略)歌ひて曰はく」という文構造に気付くべきであり、「又」は「歌ひて曰はく」に係り、「飛びて」には係らない。「浜に向ひて飛び行きき」を承けての「飛びて」であり、「浜に向ひて飛」んで行つて「其の磯」に「居」たのである。この部分は新編日本古典文学全集本に「千鳥が飛んでいって、その磯にいた時に」と訳されているのが正しい。この「浜」は「磯」をも包含した広い意味で用いられて

いることを知らねばなるまい。古事記の段階で「浜」が「磯」を除外した狭い意味と「磯」をも包含した広い意味との両様の使われ方をしてに注意しよう。次に「磯」をも包含した広い意味で使われた「浜」の用例をいくつか挙げる。

・万葉集 巻第七

一一九八番 あさりすと 磯に住むたづ 明けされば

浜風寒み 己妻呼ぶも

鶴が「あさりすと 磯に住む」のは「磯」に餌の魚貝が豊富だからであるが、その「磯に住むたづ」が吹きさらされている風が「浜風」と表現されているのは、「浜」が「磯」を除外しない意味で用いられているからである。

・夫木和歌抄 巻第二五 雑部七

永久四年百首、水海

神祇伯頭仲卿

一一六四七番 あふみがたいそのはままつをるなみにふ  
なでやすらんみつのうら人

「いそ」の「まつ」が「はままつ」と言われており、「はま」は「いそ」を含む。

・為忠家初度百首

暁天千鳥

四九四番 なみよするこじまがいそのはま風にちどりし  
ばなくあけくれのそら

「いそ」の風が「はま風」と言われている。

このように見てくると、かつて田中新（注）一氏が「浜」の語義には広狭二義あり、磯に対立して平地を指す狭義の「浜」があるとともに磯をも含み込む水際、岸辺を示す広義の「浜」もあつたのであり（略）現実には、普通名詞『磯の浜』の表記も十分成り立つと言えよう」と指摘されたとおりであると知られる。なじみの薄い地名の場合には下に「といふ」を付けるのが通例の紫式部集で「いそといふはま」と書かれていないのは「いそ」が普通名詞であったからである。そして、二一番歌の内容に都に後る髪引かれる気分が漂っていて下向時の歌と思われる点や、久保田孝夫氏が琵琶湖横断に関わる諸事例を検討された上で「いかなる理由があつたにせよ紫式部の一行が往路において湖上の中央を横断したことは考えられない（注）」と結論付けておられることを勘案すると、普通名詞としての「いそのはま」が、竹内美千代氏や加納重文氏の指摘される「海津湾あたり」に比定される可能性は高い。だが、問題は「つるのこゑごゑなくを」の部分である。

三

南波浩氏は、「つる」「たづ」に就いて、次のように述

べられる。

宣長は『古事記伝』で、「上代には、鶴をも鵠(ククヒ)をも鶴(オホトリ)をも共に総て『多豆』と云へるなり。ククヒ・オホトリなど分れたる名あるは、やや後のことなるべし。(略)鶴は秋の末より春までならでは、此国には居ぬものなるに、万葉に夏又秋の初などの歌に、多豆の鳴けることを詠めり。之れ、鶴又鶴などを多豆と云へるなり」とのべているが、たしかに、式部が「鶴」と呼んだ鳥が、同じような大きさの「鶴」か「鵠(ククヒ)」か、あるいは「鶴(コウノトリ)」かは明らかではない。しかし、鶴は「声々鳴く」といわれるようには、声を出さない(くちばしを合わせて音を出すことはある)鳥であり、浜辺などに群棲しないから、鶴ではなからう。とすれば、鶴にしても、鵠にしても、いずれも秋末に渡来し、春まで滞留している秋冬の渡り鳥であるから、この歌は秋冬の頃の詠と見られる。したがって、往路の歌ではなく、帰路の歌と見るべきであるう。

南波氏が「鶴にしても、鵠にしても、いずれも秋末に渡来し、春まで滞留している秋冬の渡り鳥である」と言われる点については専門書等に照らしても容易に確認でき

る。ここで、宣長が言及している「鶴」が日本で見られる時期について確認しておこう。『日本の鳥類と其生態』に、日本で蕃殖していた「東洋産コフノトリ」について、同地(兵庫県)に蕃殖するものは留鳥又は漂鳥にして、一部は蕃殖地に留まり、他は附近一帯に散つて越冬する。例へば豊岡附近のものは圓山川に沿つて城ノ崎附近迄移動するし、其の他のものも丹後及び但馬一帯に散らばつて越冬する様である。併し之れより猶ほ遠く移動する事は先ず無いらしい。(略)往時本邦にも多かりし頃は本邦内の到る處で蕃殖して居たらしく(八八九頁)

とある。どうやら、日本で蕃殖していたコウノトリは日本に一年中いたらしい。

併し、二一番の「つる・たづ」は「鶴(コウノトリ)」ではない、と南波氏は言われる。理由は二つ示されているが、「浜辺などに群棲しないから」と言われるのは納得し難い。神戸新聞社刊『コウノトリ』に「昭和三五年夏、出石川の浅瀬で」十二羽のコウノトリが群がついている写真が掲載されていること、同『コウノトリ誕生―但馬の空、いのち輝いて』に「コウノトリは川や沼、田畑などで餌を採り、但馬地方ではひところまで一級河川の円山川や支流の出石川の浅瀬に二十―三十羽が群れをな

し、餌をついばむ優雅な光景が見られた」(五五頁)とあることなどに拠る。

だが、もう一つ、「鶴は『声々鳴く』といわれるようには、声を出さない(くちばしを合わせて音を出すことはある)鳥であ」ると指摘される点については、『日本の鳥類と其生態』にも「此の亞種(日本にいたコウノトリが含まれる亜種)にては、未だ聲を報告されていない。其の代わり歐洲のものと同様嘴を迅速に開閉してコロコロコロ口と聞こゆる音を發する。英語では之れを clattering (獨逸語では Klappern) と稱する」(八八八頁)とある。早く、竹内美千代氏も南波氏同様の考えを述べられた。二一の詞書「つるの声々に鳴く」は、数多く飛ぶのを見、鳴き合うようであるから、声を出さず拍子木の音のような鶴の鳴き方とは違うであろう。こうして、二一番の「つる・たづ」がコウノトリである可能性は葬られて行く。

ただ、竹内氏がここで「数多く飛ぶのを見」と言っておられる点は、意味不明ながら気になる。伊藤博氏が、「式部が、旅に出て絵や装飾のイメージでなじんだ鶴に似た頸や脚の長い鳥(鷺など)を見かけ、その鳴き声に接して『たづぞ鳴く』と詠じたとして不思議はあるまい」と言っておられるが、「いそがくれ(略)たづぞなく」と

いう歌いぶりから、式部は「いそがくれ」の「たづ」の姿を「見かけ」てはいないと判断すべきであろう。つまり、式部は鳴き声を聞くのみでその「いそがくれ」の鳥を「たづ」と識別できているのである。鶴類とコウノトリは外形上類似していて相互に見間違えられる可能性は大きい。だが、式部は外形を目撃しているのではなく、「なく」「こゑごゑ」を聞いているだけなのである。神戸新聞社刊『コウノトリ』に、「ツルの類は気管が長く、発声器がよく発達しているので大きい声で鳴くが、コウノトリ類は発声器が発達していないので声を立てない。そのかわり嘴を開閉してカタカタカタという大きい音を立てる」(七五頁)とある。所謂「鶴の一声」とコウノトリの発する「カタカタカタという大きい音」とでは聞き間違える余地などあるまい。こうして、二一番の「つる・たづ」を「鶴(コウノトリ)」と解する道は更に完璧に閉ざされて行く。

#### 四

だが、詩経 豳風 東山の一節に、「雩雨其濛、鶴鳴于垤」とあり、「鶴」が「鳴く」という表現が見られるのである。「鶴」の意味が「コウノトリ」であることは大漢和辭典以下の辭書が一致して示すところである。「鶴(コウノ

トリ)は「鳴かない」と考えたのは現代人の認識に過ぎなかつた可能性がある。もう一度検討して見たい。

・抱朴子 對俗 卷第三

玉策記曰(略)千歳之鶴 隨時而鳴 能登於木。其未千載者 終不集於樹上也。色純白而 腦盡成丹。

ここで鶴が二種類に分けて認識されていることに注意しよう。「能く木に登る」鶴と「ついに樹上に集うことのない」鶴である。ここに、「千歳之鶴」とあるのは、白楽天詩集 卷八 「秋蝶」に「見ずや、千年の鶴多く百丈の松に棲むを」とあるのを参考にすると、所謂「松上の鶴」即ちコウノトリのことと考えられる。神戸新聞社刊『コウノトリ』に、「ツルはすべて湿地または草原の地上に営巣する。決して樹上に営巣することがなく、また木の上に止ることもない。しかし、コウノトリ類は樹上・屋上・岩棚の上など高いところに営巣し、またしばしば木の上に止って休む」(七五頁)とあるのにも符合する。「其未千載者 終不集於樹上也」とある方は現在の鶴類を指すと考えて矛盾しない。つまり、「千歳之鶴 隨時而鳴 能登於木」とあるコウノトリも「其未千載者 終不集於樹上也」とある現在の鶴類も、共に「鶴」という語で一括されている。故に「鶴」の形態に関して「色純白而 腦盡成丹」と一種類しか示さない。往時

の「鶴」概念は現在よりも広いのだ。「鶴」がコウノトリのみを意味するのと大きく異なる点である。

ツルとコウノトリの間に右のような習性上の差が生ずるのは、後趾の位置及び長さが異なることに由来する。「鶴」について『季刊アニマ』で鳥類学者内田清之助氏が、「鳥の指はふつうには四本で、人間でいえば親指、人指指、中指、薬指の四本だけである(略)。そして、この四本のうち三本は前方に向かい、一本は後方に向かっている。これは親指に相当するもので、俗に控爪(ひかえづめ)といわれているが、この控爪が鳥の種類によって、前の三本と同じ高さにあるものと、少し高い所からでているものとある。鶴の場合は、前指より少し高い位置にある」と指摘され、「鶴科 CICONIIDAE」について、『日本の鳥類と其生態』で、「前3趾は基部のみ膜にて連絡せられ、爪は短くして縁は平滑である。後趾は短きもほぼ前趾と同一平面にある」(八八四頁)と指摘されている。又、控爪(後趾)がコウノトリは比較的長く、鶴は極端に短い。<sup>(注12)</sup>つまり、鶴は「前指より少し高い位置に」極端に短い控爪(後趾)があるため木の枝を足指で掴むことができず、コウノトリは比較的長い控爪(後趾)が「ほぼ前趾と同一平面にある」ため木の枝を足指で掴むことができるのである。ここで、本論に戻る。

さて、抱朴子の右引用部で特筆すべきは「千歳之鶴」コウノトリについて「鳴く」とある点である。また、「能く木に登る」「コウノトリ」の方が「千歳之鶴」と高く評価され、「ついに樹上に集うことのない」「ツル」の方が「其未千載者」と低く評価されていることも見逃すまい。なお、この引用部直後で「千歳の松柏」に言及される点も注意。

・藝文類聚 卷八八 木部上 松

神境記曰、榮陽郡南 有石室 後有孤松千丈 常有

雙鶴(略)

この「鶴」は、「孤松千丈」に棲み付いている点から、コウノトリと知られる。

・全唐詩 卷六十 李嶠 四 松

(略) 鶴棲君子樹、風弘大夫枝(略)

この「鶴」も「君子樹(松)」に棲んでいるのでコウノトリと考えられる。

そして、白楽天詩後集 卷十七の「池鶴八絶句」に注目しよう。先ず、「序」で「池上有鶴(略)鶴亦時復「鳴」と紹介される「鶴」は、「鳴く鶴」であることに留意しよう。続く「鷄贈鶴」の節でこの「鶴」の発する「一聲」が「鷄」によって取り上げられ、この「鶴」が「聲」を発することが知られる。そして、更に続く「鶴答鷄」の節を見る。

爾爭伉儷泥中鬪 我整羽儀松上棲

不可遣他天下眼 却輕野鶴重家鷄

「鶴」は、「羽を整えて松の樹上に棲む」自分の方が「つれあいを争って地上の泥中で鬪う」鷄よりも偉いのだと、威張っている。「松上に棲む」の部分から、この「鶴」が現在の「鶴類」ではなくコウノトリであることが明白であろう。白居易がコウノトリに関し「聲」「鳴く」の表現を用いているわけである。又、この詩は「鶴」が「鷄・鳥・鶯・鶉」の四種の鳥類と贈答を展開する内容になっているが、その際、他の鳥と対置される「鶴」が実は現在の「鶴類」ではなくコウノトリであることは十分に注意されなければならない。当時の「鶴」を代表するものは松上に棲むコウノトリであったのである。

## 五

次に、日本の漢詩に目を向けよう。

田氏家集(注)の「叙雪」の中で、松に降り積もる雪の白さを「松に棲みて鶴おのづからに馴る」と比喩表現しているが、この「鶴」は「松に棲みて」とある点からコウノトリと知られる。同集「看侍中局壁頭挿紙鷄 呈諸同志」のなかで出世に遅れた状況を譬えて「應同鶴滯重阜日」と詠じているが「重阜(おくての稲の植えられた夏の田)」

に滞まっている「鶴」は時期的に冬鳥の鶴類ではあり得ずコウノトリである。

次に、同集「鶴棲松」を引く。

千年松與千年鶴 同類相依樹抄史

放出高聲青鶴遠 助來幽趣翠嵐添

寒深團雪幢陰厭 晝後殘雲蓋影兼

密葉怨繁疏葉就 低枝嫌短上枝占(略)

「鶴棲松」の題が既にこの「鶴」がコウノトリであることを示す。詩の中で「密葉の繁きを怨めば疏葉に就き低枝の短きを嫌へば上枝を占む」とあるのは、現在言う鶴類ではなくコウノトリの生態である。松に棲むコウノトリの姿は「千年の松と千年の鶴と、同類相依」と詠われ、「松」に似合いの鳥はコウノトリであった。その「鶴」即ちコウノトリは「高聲」を放出すると表現されている。なお、「寒深團雪」の語は季節が冬であることを示すので、日本で冬にもコウノトリが見られた例となる。

・和漢朗詠集 卷上「十五夜 付月」に、「岸白還迷

松上鶴 潭融可算藻中魚」という菅原淳茂の句が載っている。月光が如何に明るいかを表現している句であるが、「松の上の鶴」とは、コウノトリのことである。

・本朝麗藻 卷下 山水部に、善滋(慶滋) 為政が「晴後山川清」の題で詠んだ詩が収められているが、その一

節に「松鶴翫羽高欲舞」とある「松の鶴」もコウノトリである。

・本朝無題詩 卷四に、藤原明衡が詠んだ「夏日作」と題する詩が見られるが、その一節に「夏日優遊興味餘(略) 邊岸近交松下鶴(略)」とある。「岸をめぐりて近く交わる、松の下の鶴と」とある如く、この「鶴」は「松の下」に在るが、季節が夏であることからコウノトリと判断される。「近く交わる」の部分に留意しよう。神戸新聞社刊「コウノトリ誕生―但馬の空、いのち輝いて」に、「コウノトリは山麓の木の上などに巢をつくる習性があり、古くから比較的、人里に近い場所に生息。」とあるとおり、コウノトリは人をあまり恐れず、前に言及した神戸新聞社刊「コウノトリ」所載の「昭和三五年夏、出石川の浅瀬で」十二羽のコウノトリが群がっている写真でも、人や牛のそばでコウノトリが群がっているのである。人がコウノトリと「近く交わる」ことは珍しい事ではなかった。

## 六

次に、和歌を見よう。以前、万葉集の「たづ」を調査された竹内美千代氏は「万葉集」の歌のうち、今日鶴の居ない季節に鶴を詠んでいるのは(略)七首である」

と指摘され、四五六番・千番・一五四五番・二二四九番・三五九五番・三五九八番・四〇三四番を挙げられた。時期的に見て冬鳥の鶴類ではなくコウノトリを詠んでいると思われるのであるが、「蘆鶴の音(ね)のみし泣かゆ」「沖つ渚に鳴くなる鶴」「川瀬の鶴は鳴かずともよし」「鶴が音(ね)の聞こゆる田居」「鶴が声すも」「あさりする鶴鳴き渡るなり」「鶴は今そなくなる」という表現が順次用いられている。コウノトリは「音(ね)」や「声」を發して「鳴く」鳥なのである。

・伊勢集 八四番

まつすすゑにつるたり。

あらはなるかたにしもすむあしたづは千よみむこと  
の心なるべし

屏風歌であろうが、「まつすすゑ」は松の木末(梢)の意で「あらはなるかた」と承けられている。『伊勢集全釈』は「松の遠景に鶴という構図」とするが、それでは「あらはなるかた」と整合しない。松の梢に棲むのは現在言う鶴類ではなくコウノトリである。この「つる」が「千よみむことの心」を持つのは自身が千年の寿命を有するからであり、抱朴子 對俗 卷第三に「玉策記曰(略)千歳之鶴 隨時而鳴 能登於木」とあった考え方に沿う思考である。

・土佐日記 承平五年一月九日条

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の数いくそばく、幾千年経たりと知らず。根ごとに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよふ。おもしろし、と見るに堪へずして、船人の詠める歌、

見渡せば松の末ごとに住む鶴は千代のどちとぞ  
思ふべらなる

とや。この歌は、所を見るに、えまさらず。

かつて、片桐洋一氏(注16)が「一体、貫之が、宇多の松原の景を、その日記にとどめたのは、千年の松に千年の鶴が飛び交う景であつたからである。もし、これが松だけ、あるいは鶴だけであれば、恐らく問題にならなかつたであろう」と指摘されたとおりであるが、但し、ここに「松の末」とに住む鶴」とあるのはコウノトリである。旧曆一月九日にコウノトリが日本で目撃されている。さて、「千年の松に千年の鶴」という「千代のどち」の關係を最も強く印象付ける形は、鶴が松に棲んで一体化している形であろう。樹上に棲むことも枝に止まることもできない現在言う鶴類はこの点不利で、「松」に棲む「鶴」としてコウノトリが注目を集めることになる。片桐氏が「松と鶴の配合は、神僊思想とともに中国にその源を發し、奈良時代、既に本邦に渡来、本朝漢詩文の表現にも大きな

影響を与えるとともに、いわゆる国風暗黒時代に一層の醸成を果たして、『古今集』以降の和歌へ伝わり、以後、固定した組合せとなって今日に伝わったものである」と詳細に論証されており、現在言う鶴類よりもコウノトリの方が往時注目されていたのは神僊思想の下支えがあったからであると知られる（抱朴子等に見られる神僊思想が衰弱すればコウノトリへの注目度も低下するとも言い得る）。

・貫之集に「わがやどの松の梢にすむ鶴は千代の雪かとおもふべらなり（五一番）」「松がえにふりしく雪を蘆たづのちよのゆかりにふる（降る・経る）かとぞみる（二七八番）」「松がえに鶴かとみゆるしらゆきはつもれるとしのしるしなりけり（三七三番）」などとある「鶴」「蘆たづ」も冬のコウノトリを意味し、松に積もった雪とコウノトリの白さの類似を詠ったものである。これらを踏まえて、貫之集七四番歌を検討しよう。

千世までの雪かとみれば松風にたぐひてたづの  
声ぞきこゆる

「千世までの雪」というの千年の松に積もった雪を意味し、「たづの声」が「松風にたぐひて」「きこゆる」のは、「たづ」が「松の梢にすむ鶴」コウノトリであるからである。コウノトリに「声」という表現が用いられていることに

注意したい。

・拾遺集に「高砂の松に住む鶴冬来れば尾上の霜や置きまざるらん（二三七番）」「松が枝のかよへる枝をとぐらにて巢立てらるべき鶴の雛かな（一一六六番）」などの藤原元輔の歌が載っており、尊経閣本元輔集二六番に「ちどりなくなぎさのまつにこがくれてすむあしたづのよこそしらるれ」とあるが、「鶴」「あしたづ」はコウノトリを意味する。

・賀茂保憲女集 六三番「そらすみてかがみとすめるなつのひはとびかふつるのなくさへぞうき」に注目したい。田中新一氏が「現代的認識で『鶴とあるから秋冬だ』と即座にきめつけられない」例としてあげられた歌であるが、確かに「なつ」の「つる」である。時期的に見てコウノトリと判断されるが、「なく」という表現が用いられている。

・源氏物語 潘標巻で、明石姫君誕生五十日の五月五日に明石上が源氏からの祝いに対し「数ならぬみ鳥がくれに鳴く鶴（たづ）をけふもいかにと問ふ人ぞなき」と歌を返す。「み鳥がくれに鳴く鶴」は、五月五日つまり夏の「けふも」鳴いているという想定と思われる、時期的にみてコウノトリと考えられる。紫式部の作である源氏物語において、コウノトリが「鶴（たづ）」と表現され「鳴

く」と描写されている点は重要である。紫式部もコウノトリの clattering を「鶴(たづ)」が「鳴く」と表現するのである。「鳴く」というからには clattering を「音(おと)」ではなく「こゑ」ととらえていることも自明であろう。

## 七

以上により、古代中国以来、「鶴」という語は現在言う鶴類もコウノトリも含む広い概念で用いられていたこと、その中で「能く木に登る」鶴であるコウノトリは「千歳之鶴」として現在言う鶴よりも高く評価され当時の「鶴」を代表するものとなっていたこと、そのコウノトリに関して「声」「音(ね)」「鳴く」などの表現が用いられていたこと、などが明らかにになったと思う。かつて、竹内美千代氏が、万葉集に詠まれた「たづ」四七例中季節不明が二五例に及ぶ事や古今集に「たづ」「あしたづ」「つるかめ」が詠まれた総数「七首が全部季節不明である」ことを報告されたが、そのように「たづ」「つる」が季節感なく詠まれたのは、上述の如く、神僊思想の下支えを得たコウノトリが「たづ」「つる」の中核を占めていたからである。四季を通じていつでも日本で見られたコウノトリは、「古くから、比較的人里に近い場所に生息」

したとされ、人を恐れることもあまりなかったのが、平安時代の人々がコウノトリと「近く交わる」ことも出来、コウノトリの鳴き声にも馴染んでいたはずである。紫式部が「こゑ」を聞くだけで「たづ(コウノトリ)」と識別し得たのも不思議ではない。紫式部集二一番に「つるのこゑごゑなく」とあるのは、「コウノトリが声々に鳴く」意と考えて良いと思う。

## 八

以上、二一番の「いそのはまにつるのこゑごゑなくを」に関して考察を加えて来たのであるが、結局、二一番を越前下向時の夏の詠作として問題はないようである。

## 注

(1) 久保田孝夫氏『紫式部集』二題―「三尾が崎」・「小塩山」―(南波浩氏編『紫式部の方法』二〇〇二年十一月、笠間書院) 二一八頁

(2) 竹内美千代氏の御説は、以下、同氏『紫式部集補注』いそのはま・たづ考(神戸女子大学紀要 第二卷 一九七二年三月)に拠る。

(3) 南波浩氏の御説は、以下、同氏著『紫式部集全評釈』(一九八三年六月、笠間書院)二〇番・二一番部分に拠る。

(4) 加納重文氏の御説は、以下、同氏「紫式部越前往還の道」

(南波浩氏編『紫式部の方法』二〇〇二年十一月、笠間書院) に拠る。

(5) 田中新一氏の御説は、以下、同氏「紫式部集」羈旅歌の地名考証」(福山女学園大学研究論集 第三十号 人文科学編 一九九九年) に拠る。

文科学編 一九九九年) に拠る。

(6) 久保田孝夫氏「紫式部越前への旅―紫式部集をめくって―」(同志社国文学 第十八号 一九八三年三月)

六〇頁

(7) 山階芳麿氏著『日本の鳥類と其生態』第二卷(一九四一年一月、岩波書店)

(8) 坂本勝氏編著『コウノトリ』(一九六六年十一月、神戸新聞社出版部)

(9) 但馬コウノトリ保存会編『コウノトリ誕生―但馬の空、いのち輝いて』(一九八九年十二月、神戸新聞総合出版センター)

(10) 伊藤博氏「紫式部集の諸問題―構成を軸に―」(中央大文学部紀要 文学科 第六三号 一九八九年三月)

五頁

(11) 内田清之助氏「美術の鶴真贋抄」(季刊アニマ 創刊号

鶴 一九七五年五月)

(12) 宇田川竜男氏著『原色鳥類検索図鑑』(一九六四年十月、

北隆館) 十九・四五・四六・四七頁

(13) 中村璋八・島田伸一郎両氏著『田氏家集全釋』(一九九三年四月、汲古書院)

(14) 大曾根章介・佐伯雅子両氏共著『校本本朝麗藻』(一九九二年十二月、汲古書院)

(15) 関根慶子・山下道代両氏共著『伊勢集全釈』(一九九六年二月、風間書房) 一七四頁

(16) 片桐洋一氏の御説は、以下、同氏著『古今和歌集の研究』(一九九一年十一月、明治書院) 所収「松鶴図淵源考」に拠る。

なお、日本紀略は新訂増補国史大系本を、紫式部集・為頼集・夫木和歌抄・為忠初度百首・伊勢集・貫之集、拾遺集・尊経閣本元輔集・賀茂保憲女集は新編国歌大観本を、古事記は新編日本古典文学全集本を、万葉集・土佐日記・源氏物語は新日本古典文学大系本を、和漢朗詠集は新潮日本古典集成本を、本朝無題詩は群書類従本を、詩経は漢詩大系本を、抱朴子・藝文類聚は新編諸子集成本を、白楽天詩集・白楽天詩後集は続国訳漢文大成本を、全唐詩は中華書局刊『全唐詩』を用いた。又、傍線は全て安藤が付した。

(あんどう・しげかず/愛知教育大学)